シカナル計画

瞬牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シカナル計画

【Ｎコード】
Ｎ３３７９ＢＡ

【作者名】
瞬牙

【あらすじ】
私のもうひとつのサイトにも載せましたが、こちらにも。
ナルト→→→←シカマルで、語り役は各話かわります。
ナルトが毎日シカマルに告白するところからお話が始まり、ナルト総受け。
アカデミーに部活動なんてないし夏休みとかあるの？
みたいな突っ込みはご容赦を。

毎日の告白

「シカマルー！！！大好きだってばよ！！」
「うぜぇ。」
本日最初の告白。
さて、今日は何回言われるのだろうか。
アカデミーに入学してからよくつんでいるナルトとシカマル。
ナルトが、最近女らしい。
男だが、整った顔立ちにやわらかそうな蜂蜜色の髪の毛、すべてを吸い込んでしまいそうな空の色をした瞳。九尾の力で、傷一つない真っ白なモチモチの肌。
一緒につるんでいる身としては心臓にも体（主に下半身に）悪い。
アカデミー生とはいえ、もうすぐ卒業わけで、色任務のための授業だってある。
それには対男色家の知識だってあるわけで。

キバはいつも、悶々としていた。

「なあ、シカマル。」
さっさとこの状態を終わらせたいキバは、シカマルに尋ねた。
ナルトに興味はあるのか、と。
「ナルトに興味？恋愛感情の話か？さあ、どうだろうな。」
シカマルは含みのある笑いをしながら去っていった。

「体に悪いんだっつーの、さっさとくっつけバカヤロー。」

実際どうだろうな。といいながら、この二人はドベ２のくせに組むとどんな任務、演習でも達成率１００％という最強コンビなのだ。
「ああ、めんどくせー」

俺はヘナヘナとそこに座り込んだ。
「どうしたんだってば？シカマルの口癖何て言って。キバらしくないってば。」
「ああ、ちょっとな…」
ふと、ある作戦が頭の中を通過した。
「これだ！！」
ガバッと体を起こした俺に驚いたナルトは固まったまま動かない。
「いいこと教えてやる！」
「いいこと…？嫌な予感しかしないってばよ…」
ナルトはあからさまにいやそうな顔をした。
「シカマルのことでもか？」
俺はニヤリと笑っていった。
「はやくいえってばよ！！」
思ったとおりの反応で次は苦笑がもれた。
「はいはい、あんな？ゴニョゴニョゴニョ…」
俺は思い付いた作戦をナルトに話した。
「な。簡単だろ？」
「簡単だろ？じゃないってばよ！！そんな恥ずかしいこと出来る訳無いってばよ！！」
「毎日告白してるやつがよくいうぜ。」
「それは…その…」
まだもじもじしている。
「やんの？やんねーの？」
「…やる」
そして、ナルトは行動を開始した。

放課後、教室で俺はぐーたらしていた。正しく言うと、イノをまっていた。
「シカマル！ちょっといいってば…？」
ナルトが珍しくおとなしく声をかけてきた。

「んだよ。」
ナルトは俺が好きらしい。
ぶっちゃけ俺も好きだ。
だけども、あんだけはっきり言われたら男として微妙だ。
し、感情を表すのが自覚できるほど下手な俺は、いつも毒をはいてしまう。
「なあ、シカマル。俺、やっぱりシカマルが好きなんだってばよ。シカマルは俺のこと嫌いなのか？」

放課後、夕日を浴びて上目遣いで俺を見上げるナルトは、

正直、ヤバイ。

「シカマル…？」
なかなか返事をしない俺にナルトは驚きの行動を仕掛けてきた。服の胸の辺りを掴み、涙目で見上げてきた。
「ナルト…」
そのナルトをみたら、自然と言葉が溢れ出してきた。
「俺も…その、好きだよ。ナルトが。」
「シカマル！！」
ナルトは俺に抱き着いた。
それを受け止めながら誓った。

この小さな子を護っていこうと、里のやつらや、上層部のやつら、ナルトに害なすものすべてから。
「大好きだってばよ。」
「俺も大好きだ。一番愛してる。」

後日。
「キバあーー！！！」

「どうしたナルト？」
「えっへへー」
ナルトはシカマルと腕を組ながらぶいっといわんばかりにブイサインをして、こぼれんばかりの笑顔をみせた。
キバは、これでナルトも落ち着いて、心臓も体も休まるだろうとおもった。
しかし、次は、男の色香がでてきたシカマルと、女みたいな色気がでてより一層かわいらしくなったナルトに、アカデミーの生徒（と、一部教師）は悩まされることになったとさ。

ちなみにシカマルはあのあとイノに怒られなかった。
イノはキバに頼まれた、仕掛人の一人だったから。

毎日の告白（後書き）

今回の語り役はキバでした^^

次回の語り役は春野サクラさんです！

努力は報われる…？

「シカマルー！！！大好きだってばよ！！」
半ば朝の挨拶化したナルトのシカマルへの告白。
変わったことといえば、
「ん。俺も好きだぜ、ナル。」
シカマルがナルトに返事をするようになり、とろけるような極上の笑顔を見せるようになったこと。
そりゃファンクラブだってできるわよね。
そのせいか、売上は右肩上がり。ありがとう二人とも！
「またやってるわよあいつら！サクラ、ヒナタ、ネタのチャンスよ！」
あ、そうそう申し遅れましたが、わたくし、今回の語り役の春野サクラです。文学部所属の部長よ！同人誌だしてるの。
「サクラちゃん…？はやくいかないとネタが…」
ネタっていうのはね…ま、後で話すわ、
「それよりネタよ！！」
「「どれより…？」」
「いつかわかるわ。」
貴女たちにも回ってくるでしょうし。←はい、まわします。
「で、今日はどんな感じ？」
「そうね、最近代わり映えしないけど、抱き着いて、頭撫でられて、ね。」
「ちっ、ネタに使えないじゃない。発売日は2週間後だっていうのに。」
「そうだね…印刷のことも考えたら10日以内には原稿完成したいね。」
「校閲もしないといけないし…どうしましょうか…」
「おまえたち、大切なことを忘れてはいないかい？」

「綱手先生！！」
綱手先生は文学部の顧問なのよ。
綱手先生は言葉を続けた。
「夏休みには、運動部と、文化部の交流を深めるために、合同合宿がある。それを使えばいいじゃないか。」
ナルトはサッカー部、シカマルは幽霊部員だが文学部だ。各部の部長の許可が下りれば成立。
サッカー部の部長はキバ。
キバも私たちの本の定期購読者だし、サッカー部にはシカマルのファンが多い。
許可は下りるだろう。
「綱手先生天才！」
「そうよ、使えるわ！運がよければナマが見られるかも！！」
「そ、そうだね…」
（ナルト君のナマ…／／／）
「なら、早速よ！申請用紙もらってこなくちゃ！」
「ほれ。これじゃろ。」
「校長！？いつの間に？」
「ほっほっほ。」

そして、私達の、
シカナル計画は発動した。

努力は報われる…？（後書き）

ということで、今回の語り役はサクラでした。
次のお話は

次回は…日向ヒナタさん？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3379ba/

シカナル計画

2012年1月8日20時48分発行